

没後37年

# 土方巽

を語ることXII

2023年1月21日[土] 13時~19時

慶應義塾大学三田キャンパス 東館6F G-Lab

事前予約制・参加無料・入退場自由

21st January 2023, 1-7pm

Keio University Mita Campus, East Research Building 6F G-LAB

Reservation required, Admission Free

“The 37th Anniversary of Hijikata Tatsumi’s Death:  
Talking together about Hijikata Tatsumi”

第一部 13:00~16:30

没後37年  
土方巽を語ることXII

ゲスト講話：笠井 叡 Kasai Akira

土方アーカイヴ・海外からの活動報告など

第二部 17:00~19:00

慶應義塾大学 2022年度新入生歓迎行事  
笠井叡ポスト舞踏公演 記録映像上映会  
Kasai Akira Post Butoh Performance Video Screening

『今、シヨパンを踊る』

出演：笠井 叡

音響・照明：曾我 傑



〈バラ色ダンス〉(1965年)リハーサル 左から笠井叡、大野慶人、石井満隆、土方巽  
右上写真 〈形而情學〉(1967年)左：大野一雄、土方巽、右：高井富子、笠井叡  
撮影：中谷忠雄

2022年もまた厳しい状況でしたが、それでも舞踏の公演は数多く実施され充実していたとも言えます。国際的にも舞踏は減衰するどころか、パンデミックを超えて活動が広がっています。

舞踏は肉体が危機にあってなお求められ、危機の時代はまた精神の自立と連帯を促す契機ともなるでしょう。土方巽は舞踏は存在に振り付けると言いましたが、今日と明日において、舞踏が向かう方位と個々の舞踏家の実存がどうかクロスするのかわかれるところです。

2022年もまた、土方巽とともに活動された方々が幾人も鬼籍に入られました。時代が過ぎてゆくことを思い知らされます。

そして、2023年は土方巽の没後37年となります。37年を経ても、土方巽とその舞踏はあらためて問われています。土方巽が世界に向けて開いた舞踏を、今どうあればいいかを問いかけるためにも、土方巽の肉体と言葉が求められているとも言えましょう。

土方巽没後37年の「土方巽を語ること」には笠井叡さんをお迎えます。笠井さんは土方巽の最も鋭い批判者であり、同時に最も深い理解者であったと言えます。そして、今なお過去を問い未来を開こうとする笠井さんの肉体と言葉は今日の舞踏に向ける刃でもあります。

出会い語り合うことが切実に求められています。2023年のこの日も、限られた時間ではありますが、この一年と次の一年を語る貴重な時間になればと願っています。

# 没後37年 土方巽を語ることⅪ

2023年1月21日(土)

慶應義塾大学三田キャンパス 東館6F G-Lab

事前予約制・参加無料・入退場自由



⇨ お申込みはこちら (Peatix)  
定員になり次第締切・オンライン配信あり

## 第一部

13:00 開会のご挨拶

13:10 トーク  
「土方巽について」(ゲスト講話：笠井 叡)

14:00 フリートーク  
「巽三昧」(ファシリテーター：森下 隆)

16:00 トーク  
「世界各地からの報告、世界各地と交流」  
海外からの報告を頂き、参加者の皆様と自由に語り合う場とします。

16:30 終了予定

## オンライン配信あり (Zoom Webiner)

\* 同日開催の第二部(新入生歓迎行事上映会)については、  
オンライン配信はありません。



諸般の事情により、開催形態や内容に変更が生じる可能性があります。必ず直前にアート・センターHPをご確認の上、お越しくださいませ。  
左記QRコードからご確認いただけます。

## 第二部

17:00 慶應義塾大学 2022年度新入生歓迎行事  
笠井叡ポスト舞踏公演

『今、ショパンを踊る』記録映像上映会

19:00 終了予定

\* 同日開催の「土方巽を語ることⅪ」第二部として、続けて開催されます。  
上映会のオンライン配信はありません。

例年行われている、慶應義塾大学新入生歓迎舞踏公演におきまして、「今、ショパンを踊る」というタイトルのもと、ショパン作曲の「ピアノ協奏曲第1番 短調 作品11」と「葬送行進曲」の二曲で、新入生をお迎えしたいと思います。ショパンは僕にとっては、一人の「舞踊家のような作曲家」なのです。彼は、ピアノに向かって即興演奏をしているというよりも、ピアノという楽器をパートナーにして、いつも踊っていたような気がします。ベートーヴェンやモーツァルトのように、大きな交響曲をほとんど作曲しなかったため、このピアノ協奏曲第一番は、ある意味でとても珍しい曲です。そして祖国ポーランドを愛する、あの激しさ。心は常にフランスの貴族のサロンをぬけて、銃をもって立ち上がろうとする革命の炎を、常に胸の中に秘めていました。時代が大きく変わろうとしている今、あらためてショパンの世界に浸りたいと思います。

笠井 叡

## 笠井 叡 Kasai Akira | プロフィール

笠井叡は1943年三重県で生まれた。裁判官であった厳格な父親、笠井寅雄の影響下で幼少時代を過ごす。1954年9月26日の洞爺丸海難事故で父親を亡くす。キリスト教の洗礼は受けていないが、教会生活は長く、「イエスの復活」という歴史的事実は笠井にとって生涯のテーマとあっていい。江口隆哉・宮操子のスタジオで学んだことでダンスの世界に入り、後に大野一雄に出会い、三年間、個人指導を受ける。1963年10月、朝日講堂で「犠儀」を踊ったことが遠因となって土方巽と出会い、1965年11月「バラ色ダンス—A LA MAISON DE M. CIVECAWA」(千日谷会場)に出演する。1971年大使館設立、1979年から1985年までドイツに在住した。オイリュトミー、パントマイムも視野に入れ、狭い意味での「舞踏」に囚われない表現者である。

笠井は『カラダと生命—超時代ダンス論』の冒頭で次のように述べる、「歴史というものが常に生きた存在として変化し続けている限り、どんな時代も一つの転換期です。けれども、一人の人間はすべての時代を生き続けているのではなく、ある特定の時代を生きているわけですから、自分が生きている時代そのものが、どのような転換期であるかをリアルに感じ取るためには、歴史全体を俯瞰することができるような、何らかの想像力を駆使しなければなりません」。この言葉に表れているように、笠井は、踊りにおいても、現代性、社会性を強く意識する。そして、2013年度「日本国憲法を踊る」で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞している。笠井叡の慶應義塾大学新入生歓迎舞踏公演への出演は、2010年度「詩と舞踏のセッション：閃光のスフィア」(吉増剛造との共演)、2020年度「日本国憲法を踊る」、2021年度「使徒ヨハネを踊る」に続いて四度目である。(小菅隼人記)



撮影：大洞博晴

【第一部】 主催：慶應義塾大学アート・センター / 企画：慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイブ  
協力：土方巽アスベスト館、NPO法人舞踏創造資源、一般社団法人天使館  
【第二部】 主催：慶應義塾大学教養研究センター日吉行事委員会 (HAPP) / 慶應義塾大学アート・センター  
協力：慶應義塾高等学校 / コーディネーター：小菅隼人

## Information

慶應義塾大学アート・センター 土方巽アーカイブ 担当：石本 Tel: 03-5427-1621 E-mail: ishimoto@art-c.keio.ac.jp  
Keio University Art Center Hijikata Tatsumi Archive